

## 研究計画・方法

これまで行なってきたソクラテス研究をさらに進めるとともに、プラトンの言語哲学の研究に着手する。そのための基礎作業として関連文献の網羅的な収集と検討を行なう。また現代の言語哲学、倫理学関連の文献についても同様の作業を行なう。他方、これと並行してアリストテレスに関しては、京都大学学術出版会による西洋古典叢書の一つとして、現在作業中の『ニコマコス倫理学』の翻訳を継続して推進する。この著作についてはすでに西洋では長期にわたる研究の蓄積があるが、そうした成果をできるかぎり踏まえて翻訳の作業を進めたい。以上の作業を行なう上で多くの情報の円滑な処理がなされねばならず、そのために関連するすべての分野で、CD-ROM化が行なわれているテキスト、および検索システムを有効に活用したい。

## B01「伝承と受容(世界)」

### B01 「李氏朝鮮における中国古典の受容と学問知の形成」

研究代表者 吉田 光男  
東京大学大学院人文社会系研究科 教授

#### 研究目的

本研究は、士族(士大夫)による中国古典の受容状況と、それを通じた学問知の形成過程を、文献学的方法と現地調査により、古典籍の流入・流布・蓄積・活用という具体的な場において分析する。

李氏朝鮮時代(1392~1896年)の知的・政治的エリートである士族たちは、中国古典を積極的に受容し、その基盤の上に教養と正統意識に裏打ちされた精神世界を形成し、社会の中で支配的地位を保持していた。儒教的秩序意識が濃厚であり、学問知が社会の集団価値として広く認められていた李氏朝鮮時代において、士族たちは中国古典とりわけ儒教の古典を身につけることを自らの社会的正統性を主張する根拠としていた。中国古典籍と士族との接触状況の解明は、かれらの学問知と正統意識が構築されていく様相を浮き彫りにさせることになる。

#### 研究計画・方法

##### 研究分野

研究計画は以下の分野に分けて実行する。

1. 文献調査 日本・韓国の機関・個人を対象として、李氏朝鮮時代に中国から流入、ないしは朝鮮において刊

行された中国古典籍に関する蔵書調査を行う

2. 現地調査 韓国における古典籍の活用状況を調査する
3. 資料収集 マイクロ・フィルム、電子複写により資料を収集する
4. 情報整理 収集資料などをコンピュータで整理し、データベース化をはかる
5. 成果発表 調査・収集資料を分析し、論文等によって成果発表を行う。

##### 実行日程

おおよそ以下の日程により研究を行う。

- 5・6月 主に東京地区の資料所蔵機関を調査
- 7・8月 韓国の書院・郷校・宗家を対象とした地方調査
- 9~11月 主に西日本地区の資料所蔵機関を調査
- 12月 韓国において奎章閣・蔵書閣を調査
- 1~3月 資料の整理と分析

### B01 古ジャワ版『マハーバーラタ』の伝承と受容

研究代表者 安藤 充  
愛知学院大学文学部 助教授

#### 研究目的

本研究は、サンスクリット叙事詩『マハーバーラタ』が、古ジャワ語散文の「パルワ」として受容されていくプロセス、つまり、サンスクリット語『マハーバーラタ』の各巻が古ジャワ語散文に翻案されていくうえでテキストがいかなる変容をうけているかを、文献学的に解明することをめざす。具体的には次の課題の遂行が本研究の主眼となる。

1. 終わりの4巻にあたるパルワの成立が他よりもかなり後代に下るかどうか、サンスクリット原典の変容の特徴やパルワ自体の言語学的特徴を、成立年代が判明している「ウィラータパルワ」などと比較対照させて検証する。
2. 『マハーバーラタ』に取材した古ジャワ語韻文作品『パーラタユッタ』を手がかりに、サンスクリット原典~パルワ~カカウィンという伝承のプロセスの一面を解明する。
3. いかなる系統のサンスクリット・マハーバーラタが古ジャワ文学世界に伝えられたのか、古ジャワ版の読みのヴァリエーションのうちから特徴的なものに注目して考察を加える。

#### 研究計画・方法

まず『マハーバーラタ』第15～18巻にあたる部分及びパルワの読解とサンスクリット原典の対照作業をおこなう。パルワについては、現行刊本のみには頼ることは文献研究として不十分と思われるので、オランダ・ライデン大学図書館に赴いて写本資料を閲覧・収集することにより、テキスト校訂作業およびパルワの読解をすすめる。

次に、パルワテキストとサンスクリット原典と比較対照させる。プーナ批判版のサンスクリット原典の異読及び、南方版の読みにも留意しながら、最終4巻のパルワによるサンスクリット原典の受容の特徴を解明する。

同様な方法で、古層に属するといわれる「ウィラータパルワ」をサンスクリット原典と対照させ、最終4巻との受容のありかたの差異の程度を検証する。

さらに、『マハーバーラタ』のバラタ戦争に取材した『パーラタユダ』を手がかりに、サンスクリット叙事詩が古ジャワ散文の「パルワ」を経て古ジャワ詩作品に翻案されるまでのプロセスを分析する。

これらの作業と並行して、パルワ及びマハーバーラタの伝承などに関する国内外の研究文献収集を、国内出張、文献複写、図書購入によって継続的におこなう。また、謝金支出による研究補助を得て文献資料情報を整理して蓄積し、データベース的ビブリオグラフィー完成に備える。

---

## B01 「悪霊」表象から見た古代地中海世界の社会史

研究代表者 大貫 隆  
東京大学大学院総合文化研究科 教授

### 研究目的

本研究は古代末期の地中海世界の内のユダヤ・キリスト教文化圏における「悪霊」の表象の特徴を、駆使し得る限りの史料の文献学的分析によって明らかにすると同時に、同じ古代地中海世界のギリシア・ローマ文化圏の碑文史料、歴史記述、文学作品、医学書などに報告された類似現象との比較によって、二つの文化圏の間に存在する思想史的あるいは宗教文化史的な伝統の本質的な違いと相互的な受容と変容の動態を明らかにしようとするものである。主として社会生態学的視点から構成された抽象度の高い概念装置を使って古代地中海世界全体を一括して「前近代的農業社会」として扱う文化人類学的研究を批判し、同じ古代末期の地中海世界の社会史を、「悪霊」表象という具体的な断面から、東西の地域差に分節して明らかにする点に本研究の独創性と意義がある。申

請者にとってこの研究課題は1975年以来一貫して関心を寄せてきたものであり、「研究業績」欄に挙げた4点の単著および共同翻訳にこれまでの研究成果が織り込まれている。

### 研究計画・方法

(1) 基本図書資料としてユダヤ教タルムードの原典、欧米語訳、電子データベース(CD ROM)を購入・整備する。(2) 前記のデータベースを処理できるパーソナルコンピュータを整備する。(3) 現在原典が入手困難で、電子データベース化されていない資料については、欧米の大学図書館あるいは知人を介して、コピーで入手する。(4) 国内の他大学や研究機関にすでに収められているデータベース(例えば Thesaurus Linguae Graecae)にもアクセスする。データベース化されていない原典で帯出もコピーも許されないものについては、実際に所在場所まで出向いて閲覧させてもらう。(5) ギリシア・ローマおよびオリエント古代社会史の研究者と意見交換する。

[平成12年度](1) 研究成果をまとめ、国内外の学会で発表する。(2) 研究成果報告書を作成・刊行する。(3) その報告をさらに拡充したものを単著として刊行するための準備を始める。

---

## B01 旧約聖書における歴史伝承の研究 …特に「サムエル記」、「列王記」、「歴代誌」を中心に…

研究代表者 山我 哲雄  
北星学園大学経済学部経済学科 教授

### 研究目的

本研究は、以下の二つの目的を持つ。すなわち、一方では、最新の考古学的・歴史学的実証研究によって再構成されるイスラエル王国時代史の経過と、旧約聖書のサムエル記、列王記、歴代誌の歴史記述の内容(すなわち歴史伝承)を比較し、特に両者の間に著しい不一致や相違が見られる場合、なぜそのような(史実とは異なる)伝承が形成され、またそこに伝承形成者としての著者たちのいかなる意図が働いているのかを解明する。他方で、同一の歴史的事態についてのサムエル記や列王記の記述と、これに手を加えて成立したものと考えられる歴代誌の記述を詳細に比較し、歴史伝承の変容の経過を追跡するとともに、その動因を解明することを通じて、イスラエルにおける歴史伝承のダイナミックな展開を跡づけたい。

本研究は、最近ドイツの学界で部分的に試みられつつ

ある旧約聖書の歴史伝承に対する伝承史的、編集史的研究方法を本格的にわが国における旧約研究に応用するという意義を持つ。特に歴代誌研究は、わが国においては従来の旧約聖書研究で最も立ち遅れてきた領域であり、邦語による学術論文も皆無という状況であるが、応募者はすでに本格的なサムエル記注解と歴代誌注解を発表しており、そこで上記の目的的部分的、暫定的な研究成果を公表してある。また、現在刊行中の岩波書店版『旧約聖書』において歴代誌の翻訳と注、解説を担当する予定であり、現在までにある程度の資料や所見をまとめてある。

この研究を通じて、わが国における歴代誌研究に開拓的な寄与を行いたい。

#### 研究計画・方法

研究の高度情報化、電子化は聖書研究の分野においても著しく進んでおり、「バイブル・ワークス」等の聖書テキスト等を収録したCD-ROMは、聖書本文の研究に欠かせないものになりつつある。率直に言えば、応募者はこれまでこの分野ではいささか立ち遅れており、家庭用のパソコンによるワープロ、E・メールによる通信、インターネットによる情報収集程度の心得しかなかったが、科学研究費による助成が得られれば、これを機に新たに研究専用のコンピュータを購入し、ハード面、ソフト面での情報化、電子化に備えた体制を整えたい。また、現在コンピュータを通じて旧約聖書学、イスラエル学研究者の間に形成されつつある研究・情報のネットワークにも積極的に参加していきたい。

北海道在住の研究者としての応募者にとって、最も深刻な問題は、研究のための最新の学術論文や研究書の入手が困難だということである。このため、豊富な学術雑誌や研究文献を所有する研究機関の図書館などに定期的に出張して、基本的な文献の借り出しや必要部分の複写を行う必要がある。また、一年に一度程度は、この分野で長い研究伝統と実績を持つ欧米の大学等に出張して、日本では入手できない資料（学位論文等）の収集に当たるとともに、最先端における研究状況を視察して、研究の水準を高める必要がある。

---

### B01 初期ギリシャ文学におけるゼウスの主権

研究代表者 安村 典子  
金沢大学工学部 教授

#### 研究目的

(1) 研究目的：初期ギリシア文学（ホメロス、ヘーシオドス、ホメロス風讃歌）におけるゼウスをめぐる権力構造に着目し、それがどのような語り的手法で語られ、どのような効果を生み出しているかを考察し、またこれらとオリエントの神話との関係を研究する。

(2) 当該研究の特色：本研究においては、従来ギリシア独自の神話と見られていたものを、オリエントとの連関で考え、しかもそれを語り的手法という側面から考察しようとしている。これは新しい独創的な視点である。これによりギリシア神話の特質が一層明確にされると期待される。

(3) 位置づけ：特に西欧では、これまでオリエントとの連関を考える研究意欲が希薄であったが、ようやくその意義が認められつつある。本研究課題は今後の西洋古典学の方向を指し示す重要なテーマである。

(4) 研究経過：これまでの研究において明確となった語り的手法の特色は、ゼウスをめぐる権力構造の中でも顕著に認められる。本研究はこのような基礎的調査に基づくものである。

#### 研究計画・方法

平成11年度には、理論的な研究と資料収集に比重を置いた活動を行う。具体的には

- (1) 関連部門の国内外の研究集会への参加
- (2) 資料・文献の収集
- (3) 関連部門の研究者との研究連絡
- (4) 研究討論会の開催、を考えている。

我が国の西洋古典学の歴史は欧米に比べるときわめて浅く、蔵書数も限られたものである。従って図書を購入は重要である。更に大学図書館の現地での利用は当該研究の効果的発展には欠かすことが出来ない。また文献

検索や研究者相互の情報交換手段としての電子メールの活用、資料・文献の整理、論文作成などのため、プリンター、スキャナーの購入は不可欠である。

---

### B01 ラテン文学におけるギリシア神話の受容と継承 叙述技術から見た研究

研究代表者 高橋 宏幸  
京都大学文学研究科 助教授

#### 研究目的

① ラテン文学によるギリシア神話の受容と継承は神話体系の同一性を保持しつつ行われた。その背景としてギリシア神話に内在する「競争原理」と技術の本質についての探求、また、「神話を語る」技術に関わる全体的な

関係性への自覚という面に本研究は着目し、ラテン文学における神話の叙述技法の現れを個々の作品に観察・検討し、そのうえで、ギリシア神話の伝承について本質の様態の一端を明らかにしようとするを目的とする。

② 一般に神話は個人による創作とは異質と考えられる。が、本研究は、神話の語りの成立には個々の語り手と語り継ぐための技術が不可欠であり、それはまたギリシア神話の伝承過程で自覚されていたという視点に立ち、ギリシア神話を叙述技法から考察することにより、その本質にも近づきうるものとする。

③ 現在、接点の希薄な神話学と文学、それぞれのアプローチを統合し、本研究は伝承のメカニズムそのものの中に神話の創造的な働きを認め、その具体的な現れとして叙述技法に光を当てる。

④ 平成6, 7, 8年度文部省科学研究費補助金により、オウィディウス、セネカ、プラウトゥスについて、それぞれの神話の叙述技法に考究し、視野をラテン文学全般に広げるところまで準備を進めている。

#### 研究計画・方法

本研究は基礎的作業として、①関係研究文献の収集・整理、②データベースを利用したテキスト分析と関係データの抽出・整理を行い、そのうえで、③伝統的な神話の叙述技法の理解と④それらの技法のラテン文学における用例の検討とにより、ギリシア神話の受容と継承の特質を明らかにすることをめざす。

①のために、ギリシア・ラテン文学全般の関係図書、および、神話学、図像学、修辞学などを含めた西洋古典学一般関係図書の充実、データのデジタル化に向けてOCR等の読みとりソフトの整備を図る。

②のために、各種のCD-ROM、および、WWWサイトを利用する。この検索とデータ抽出のために最新の検索およびデータ処理ソフト、そして、効率的処理可能なコンピューターを備える。

これらの作業は、膨大なデータ処理、また、個別の検索自体に要する時間を考慮して、補助人員確保のための研究補助経費、とともに、コンピューター関係消耗品、ファイル用品の経費を計上した。

ギリシア・ラテン文学がヨーロッパと日本でどのように伝承・受容されたかという問題を解明するために、本研究はその調査対象をイソップ寓話とする。今年度は、西洋におけるイソップ寓話のテキスト伝承の検討対象期間を古代末期以前までに限定する。具体的には、パレロンのデメトリオスによる集成がバブリオス、パエドルス、アウリアヌスなどの古代寓話へとつながっていく過程でテキスト成立、保存、伝播がどのようになされたかを明らかにする。同時に、『エソポのハプラス』と『伊曾保物語』の祖本について研究を進め、日本における最初のヨーロッパ文学受容の背後にあった具体的な事情を明らかにする。

#### 研究計画・方法

まず最初に、パレロンのデメトリオスによる集成が行なわれたアレクサンドリア時代に文学テキスト全般がどのような事情にあったかを、アレクサンドリア図書館でのテキスト収集・整理との関連で解明する。そしてそのような状況のなかにあつて、デメトリオスによってイソップ寓話の集成が行なわれた時期の特定、目的や資料の典拠などを解明する。さらにこの集成本の成立以降については、その保存および伝播事情を調査する。ついで、1世紀のパエドルスやバブリオスまでの間にデメトリオス本やアウクスブルク校訂本などにどのような変遷があったかを調べる。これによって、アウリアヌスや古代末期の寓話へのつながりをたどる調査の手がかりができるであろう。

一方、西洋古典文学が我が国において初めて受容された経緯を検討するために、安土桃山時代においてキリスト教伝来とともに宣教師たちがどのようなギリシア語・ラテン語テキストをもたらしたか、そしてそれらがどのように受容されたのかを明らかにする。具体的には、イエズス会の出版活動が日本人信徒とどのような協力関係でなされたのかをも含めて考察する必要がある。このようにして今年度はまず『エソポのハプラス』と『伊曾保物語』の祖本調査の基礎固めをしておきたい。

---

### B01 西洋古典文献の伝承史と中世東西地中海世界の修道制をめぐる実証的研究

研究代表者 秋山 学  
筑波大学文芸言語学系 講師

研究分担者 桑原 直己  
筑波大学哲学思想学系 助教授

#### 研究目的

---

### B01 ヨーロッパと日本における西洋古典文学の伝承と受容

研究代表者 西村 賀子  
名古屋経済大学法学部 助教授

#### 研究目的

研究費交付希望期間における研究の到達目標。

地中海世界における古典文献の伝承史に関しては、東西において若干の差異は認められるものの、総じて教父たちの神学理論（「出エジプトの原則」）による古典受容を経たのち、中世初期の「暗黒時代」をくぐり抜け、9世紀ごろより小文字本への転写と並行して古典復興運動を迎えるという共通した現象を指摘することができる。それら文献筆写に携わったのは、総じてキリスト教聖職者・修道士たちであった。西方のウェルギリウスなどのわずかな例外を除き、古典古代文学はキリスト教世界において「異教」文献としての位置づけを与えられる。けれども結果的に古典の遺産は、彼ら写字修道士たちの手で受け継がれていったのである。

古典作家たちの個々の写本伝承の実際については、すでに欧米の学者たち（e.g., N.G. Wilson, L.D. Reynoldsなど）によってほぼ解明されている。しかしながら、文学・文献学と哲学・神学が分離した欧米の学問領域設定では、古典写本伝承の解明と、実際に写本筆写に関わった修道士たちの典礼生活や精神的次元の神学的研究、あるいは修道制の史変遷の解明とが相互の関連のうちに行われることはこれまでほとんどなかった。

以上のような研究状況を踏まえ、本計画は秋山（西洋古典学）および桑原（西洋中世倫理学）という筑波大学の2名の研究者によって立案された。本計画の目標は、両者の綿密な討議と連携の下に、西洋古典文献の伝承史と東西地中海世界の教会史・修道院史を辿ることにより、1) 古代文学および古代哲学（特にアリストテレス）の伝承史をめぐる基礎的研究 2) 中世各時期における修道制の史的研究、および異教文化受容をめぐる修道士たちの姿勢の明確化 3) それらの相互連関的・包括的止揚を行うことにある。このような方法で、東西中世ヨーロッパ世界における文献伝承史的研究と精神史的研究を統合させることにより、さらに新たな知見が切り開かれるものと期待される。

当該分野におけるこの研究（計画）の学術的な特色・独創的な点。

上にも述べたように、本研究は欧米古典学界で行われてきた西洋古典文献の伝承史的研究の上に立って、写本筆写という行為や文献伝承の意味を神学史・精神史的次元から問いなおそうと試みるものである。この視点は、通例キリスト教世界という印象の強い欧米世界の研究に対して、なお彼らの研究成果を多角的な視点から批判的に止揚する試みであり、国際的な次元からも極めて斬新かつ生産的な研究だと言える。

国内外の関連する研究の中での当該研究の位置づけ。

本研究は国内外において他に類例を見ないものである

が、本計画に参加する2名の研究成果の上に立ち、これを継承するものである。すなわち、秋山による文献伝承史・精神史的研究（e.g. 「バシレイオスと「ルネッサンス」神学と人文主義の関係をめぐって『地中海学研究』XXII（1999））、あるいは桑原が鋭意進めてきた倫理思想史的研究（e.g. バシレイオス『修道士大規定』の邦訳と解説（1992）、および一連のトマス・アクィナス倫理思想研究）は、本計画立案の基となっている。

現在実施中の各種研究事業との関係。

すでに、平成10～11年度の文部省科学研究費による奨励研究（A）として「古代地中海世界における神話理解と言語観」（研究代表者 秋山学）が進行中であり、やや異なった視角からではあるが、本研究計画と同様の趣旨で進められている。また秋山による平成10年度筑波大学学内プロジェクト（奨励研究）「地中海世界における古代・中世の連続性をめぐる実証的研究」は、古典の写本伝承史を通じ、従来の古代・中世地中海世界の断絶史観を正そうとする試みであり、本計画と深く関わりを持つものであった。本研究計画はこれら諸プロジェクトの進捗状況・成果をも踏まえて立てられたものである。

#### 研究計画・方法

1. 筑波大学中央図書館に所蔵されている西洋古典・中世哲学関係の一次・二次資料を、学内所蔵図書目録等を用いて包括的にリスト・アップする。
2. それに基づき、新たに必要な図書・資料等の整備作業を開始する。秋山・桑原両名が属する「筑波大学ヘレニズム哲学研究会」等の場において相互に研究状況を報告確認し、緊密な連携を保つように努める。
3. 秋山の担当する「ギリシア語・ラテン語・ヘブライ語」総合文学特講、桑原が担当する「西洋倫理思想史」「同演習」など授業科目の準備等においても、絶えず「西洋古典文献の伝承史と中世地中海世界の修道制」に関する理解と知見を深めることを心掛け、併せて学生にも斯分野に関する知識と研究動向を伝える。
4. 筑波大学における西洋古典学・中世哲学関係教官、および他大学の古典学・倫理学研究者等との間で、研究成果を積極的に相互交流させる。
5. 平成12年度末における研究成果報告書刊行に向けて、初年度内での研究成果をまとめ、公表に備える。